

博

2020 Vol.1

MARUHAKU

JOURNAL

まる博ジャーナル

創刊号

2020 Vol.1



交流館建設現場の様子

はじめに

東海村誕生以来初めてとなる博物館施設「歴史と未来の交流館」（以降は「交流館」といいます）がオープンする日まで残すところあと1年とすこしとなりました。

交流館は、博物館機能と青少年健全育成を図ることを目的とした青少年センターの複合施設であることが最大の特徴です。活動を通して東海村の郷土を次世代へ伝えていくということが大きな柱となっており、取り組みの柱となる事業が東海村全体を博物館空間と捉えて活動する「とうかいまるごと博物館事業」です。

このまる博ジャーナルは、交流館の1年間の活動記録及び本村の歴史・自然に関する情報発信を目的として発行するものです。

開館前のため、まだ準備号ではありますが、交流館の基幹事業である「とうかいまるごと博物館事業」の様子や村内の文化財についての情報が盛り込まれておりますので、楽しんでいただければと思います。

生涯学習課

令和2年3月31日

まる博ジャーナル

創刊号 2020 Vol.1

- P04 (仮称) 歴史と未来の交流館の中を
のぞいちゃおう!
- P06 とうかいまるごと博物館事業
令和元(平成31)年度の記録
- P18 東海村の埴輪コレクション
- P20 初公開! 新発見の武人埴輪
講演録 埴輪が語る古墳時代の東海村
- P30 まる博研究員からの報告



交流館の おすすめポイントを 聞いてみました！



●展示のポイント

- ・性質の異なる3つの展示室に村の風土とその上に成り立つ歴史を展示。
- ・四季に応じて展示が変わる、郷土を体感できる展示を行います。
- ・交流館を拠点として活動が村全体に広がり、その成果が交流館に蓄積・展示へ反映される循環型の活動「とうかいまるごと博物館」を展開します。

●活動のポイント

- ・歴史や自然、科学などを体験しながら学ぶ活動を実施します。
- ・遊びや体験活動での交流を通して、子どもの自主性や創造性、社会性を育みます。
- ・多世代の人と人、人とモノの交流を通して、村民の郷土愛を育みます。



案内図



活動

- カフェ
飲食をしながら楽しくくつろぎ、交流できます。
- 多目的スペース・交流活動スペース
基本展示室1とも繋がっている、施設の特徴的な大空間。キッズスペースもあります。
- 活動室①・②
多目的スペースと一体的な利用が可能。子ども科学実験や歴史・自然講座なども実施します。

東海村の歴史や文化の発信拠点、
幅広い世代が交流し郷土愛を

(仮称)歴史と未来の交流館

自由度の高い
オープンスペース



(東海消防署側)

バーベキューやテニスを
流しどめや水遊び
ができます



収蔵庫

年間を通して温度、湿度を一定にして、大切な資料を種類別に適切な環境で保存します。

展示室

- 基本展示室1
村の自然環境とそ中でつくられた風土を学べる、体験・体感エリアのある展示室。
- 基本展示室2
先人たちがどのように村の歴史を作ってきたのか、6つのストーリーで特徴的な村の歴史が学べます。
- 特別展示室
基本展示では語りきれない村の歴史や自然を様々なテーマで企画展示します。



(東海高校側)



敷地境界

(文教エリア側)

○: 既存樹木
(コナラ・ヤマザクラ・クヌギなど)

エントランスからの眺め
(イメージ)



屋外交流広場

既存樹木の木立ちを感じながら、自由に遊べる空間であり、ベンチでもくつろげる憩いの場です。また、土器作りなどの郷土を学ぶ活動、東屋のカマドや水場で野外炊事など、様々な体験ができます。

子どもたちの体験や遊びを通した活動拠点として、
育み、賑わいをつくる生涯学習の拠点施設です！

の中をのぞいちゃおう！

歴史と未来の交流館



とうかいまるごと博 博物館

●とうかいまるごと博物館（通称：まる博）とは…？

東海村をまるごと屋根のない博物館と捉える考え方です。（仮称）歴史と未来の交流館が拠点施設となり、村内に点在する文化財や自然を「屋外にある展示物」と捉え、村全域をフィールドに歴史や自然を体感できる講座や見学会・イベントを展開します！

	事業名	実施場所	主催・協力団体	参加者数(人)
1	みんなですこやかウォーキング	白方コミセン集合	健康増進課	50
2	春の生き物観察会	中丸地区	東海村の文化財と自然を守る会	5
3	スカシユリ種植え会	中央公民館	村花スカシユリ増殖事業実行委員会	28
4	ハローサイエンス 「大強度陽子加速から電車の加速へ」	アイヴィル	J-PARCセンター	24
5	みんなですこやかウォーキング	ふれあいの森公園集合	健康増進課	56
6	古代の東海村を調べてみよう！ ～地層剥ぎ取り体験～	中央公民館・中丸地区	生涯学習課	17
7	春の野草観察会	中丸地区	東海村の文化財と自然を守る会	4
8	ハローサイエンス 「ミュオンを使って物質を探る！」	アイヴィル	J-PARCセンター	21
9	磯の生き物観察会	平磯海岸	東海村の環境調べ隊	37
10	みんなですこやかウォーキング	舟石川コミセン集合	健康増進課	中止
11	ゲンジボタル観察会	細浦	生涯学習課	45
12	ハローサイエンス 「液体金属が加速器と原子炉をつなぐ」	アイヴィル	J-PARCセンター	28
13	スカシユリ生息地マッピング調査	中央公民館	村花スカシユリ増殖事業実行委員会	4
14	自然のスカシユリを見よう	国立研究開発法人 日本原子力研究開発機構	村花スカシユリ増殖事業実行委員会	26
15	昼の里山で虫を見よう！	中丸地区	東海村の環境調べ隊	30

令和元(平成31)年度の記録

このように、まる博は展示+建物+現地（フィールドワーク）で成り立つものになります。交流館の開館後にスムーズな事業展開ができるよう、まずは現地の部分を先行して取り組んでいます。

今年度まる博はどんな取り組みをしてきたのか、皆様にご紹介します！

	事業名	実施場所	主催・協力団体	参加者数(人)
16	虫博士がやってくる！クラミツ博士の研究日記	東海村立図書館	東海村の環境調べ隊	59
17	絆北側緑地の生き物に会いに行こう！	中丸地区	環境政策課	28
18	村の花スカシユリを知っていますか？	中央公民館	中央公民館, 村花スカシユリ増殖 事業実行委員会	37
19	ハローサイエンス 「低温のおはなし ～先端科学を支える低温技術～」	中央公民館	J-PARCセンター	20
20	夜の里山で虫を見よう！	中丸地区	東海村の環境調べ隊	40
21	キノコを研究しよう！	中丸コミセン	東海村の環境調べ隊	40
22	海岸の砂はどこから来たのか？ ～砂の標本作り～	豊岡海岸	生涯学習課	9
23	塩ジイの塩づくり講座	村松コミセン	生涯学習課	25
24	ナゾのワラ人形「大助人形」を作ろう	舟石川コミセン	東海村高齢者クラブ	17
25	本当にあった戦争のおはなし	中央公民館	中央公民館	21
26	真崎古墳群で古代体験	真崎コミセン	真崎の未来を考える会	67
27	交流館バックヤードツアー①	旧中央公民館	生涯学習課	27
28	交流館バックヤードツアー②	旧中央公民館	生涯学習課	18
29	交流館バックヤードツアー③	旧中央公民館	生涯学習課	27
30	この草なあに？ ～水田やあぜ道に生える植物 を観察しよう～	石神城址公園	生涯学習課	14
31	まる博ゼミナール 「鰯から見る漁業の未来」	中央公民館	中央公民館	7

	事業名	実施場所	主催・協力団体	参加者数(人)
32	J-PARC施設公開	J-PARC	J-PARCセンター	1559
33	夏の星座を見よう!	村松コミセン	東海村の環境調べ隊	61
34	ハローサイエンス 「見れば納得!素粒子ワンダー ランド」	アイヴィル	J-PARCセンター	26
35	みんなですこやかウォーキング	中丸コミセン	健康増進課	50
36	ハローサイエンス 「ミュオン素粒子で探るエネルギー 関連材料 世のため人のための ミュオン」	アイヴィル	J-PARCセンター	18
37	みんなですこやかウォーキング	石神コミセン	健康増進課	29
38	久慈川の鮭の生態と村の暮らし	中央公民館	中央公民館	13
39	ハローサイエンス 「泡沫(うたかた)の儚さの瞬間を 中性子でとらえる」	アイヴィル	J-PARCセンター	中止
40	久慈川の伝統漁法サケ漁見学会	久慈川河川敷	水辺のムラ研究会	中止
41	みんなですこやかウォーキング	真崎コミセン集合	健康増進課	40
42	みんなで答えてモザイクアート!	東海村総合体育館	生涯学習課	362
43	ハローサイエンス 「大強度ビームをつくる! ～電気と磁石のハナシ～」	アイヴィル	J-PARCセンター	60
44	真崎浦舟着場跡 紅葉狩りウィーク	真崎浦干拓事業 舟着場跡	生涯学習課	16
45	紅葉のハーバリウム作り	村松コミセン	株式会社鈴木ハーブ 研究所	27
46	天体観測会	白方コミセン	東海村の環境調べ隊	50
47	みんなですこやかウォーキング	総合福祉センター 「絆」集合	健康増進課	44
48	探鳥会	舟石川地区	東海村の環境調べ隊	14
49	ハローサイエンス 「泡沫(うたかた)の儚さの瞬間を 中性子でとらえる」	アイヴィル	J-PARCセンター	17
50	キノコの不思議な世界	中央公民館	中央公民館	5
51	化石発掘体験	須和間地区	生涯学習課	24

	事業名	実施場所	主催・協力団体	参加者数(人)
52	化石ってなぜできるの	中央公民館	中央公民館	7
53	みんなですこやかウォーキング	村松コミセン集合	健康増進課	52
54	石神小野崎氏の好敵手!? 「額田小野崎氏」とは	石神コミセン	生涯学習課	27
55	探鳥会	村松地区	東海村の環境調べ隊	23
56	ハローサイエンス 「謎の素粒子ニュートリノで探る 宇宙の物質の起源」	アイヴィル	J-PARCセンター	30
57	初公開！新発見の武人埴輪 埴輪が語る古墳時代の東海村	アイヴィル	生涯学習課	222
58	みんなですこやかウォーキング	総合福祉センター 「絆」集合	健康増進課	46
59	外来植物がなぜ脅威になるのか	中央公民館	中央公民館	9
60	ぐるっと謎解き とうかいまるごとクイズラリー	村内各地	生涯学習課	33
61	やってみっぺ！ 糸紡ぎとアンギン編み	中央公民館	ごじゃっぺの会	9
62	村松晴嵐「クロマツ林」 リジェネプロジェクト ～クロマツ植樹体験～	村松晴嵐の碑周辺	農業政策課	70
63	探鳥会	白方地区	東海村の環境調べ隊	32
64	村内の石造物にみる岩石のお話	中央公民館	中央公民館	10
65	ハローサイエンス 「止まったらおしまい～中性子で たんぱく質の「動き」を探る～」	アイヴィル	J-PARCセンター	中止
66	子ども科学広場	中央公民館ほか	青少年センター	中止
67	みんなですこやかウォーキング	総合福祉センター 「絆」集合	健康増進課	中止
68	東海村の自然の豊かさ	中央公民館	中央公民館	中止
69	ハローサイエンス 「止まったらおしまい～中性子で たんぱく質の「動き」を探る～」	アイヴィル	J-PARCセンター	中止
70	青少年育成東海村民会議白方支 部親子ふれあいウォークラリー 大会	白方地区	青少年育成東海村民 会議白方支部	中止

とうかいまるごと**博**物館



5月12日(日)9:00~12:00

古代の東海村を調べてみよう! ~地層剥ぎ取り体験~

中丸地区で地層剥ぎ取り体験を実施。この講座の中で発見された12万年前の虫の化石が新聞などに取り上げられ、話題になりました。



6月13日(木)19:00~20:00

ゲンジボタル観察会

最初に真崎コミセンでお話を聞いた後、細浦でホタルの観察を行いました。お天気にも恵まれ、たくさんのホタルを見ることができました。初めてホタルを見た人もたくさんいました!



7月12日(金)13:30~16:00

自然のスカシユリを見よう

(主催:村花スカシユリ増殖事業実行委員会)

村の花スカシユリが自生する貴重な場所や、増殖に向けての試験栽培の様子を見学しました。上に向かって元気に咲くスカシユリを見て、参加者の皆さんは元気をもらえたようでした。



8月1日(木)10:00~12:00 13:30~15:30

キノコを研究しよう

(主催:東海村の環境調べ隊)

午前中に中丸地区でキノコを採取し、午後を集めてきたキノコについて専門の先生にお話してもらいました。この日は30種類ほどのキノコを発見!参加者は興味津々でした。

前期
(4月～9月)

メニューをPICK UP★



8月17日(土)9:00～12:00

真崎古墳群で古代体験

(主催:真崎の未来を考える会)

真崎コミセン・真崎古墳群において火おこしや古墳探検、古代米の試食を行いました。多くの子ども達が古代体験を楽しむことができました。



8月20日(火)

(1)10:00～11:30 (2)13:00～14:30 (3)16:00～17:30

交流館バックヤードツアー

交流館ではどんなものが展示されるのか、「縄文時代」・「古墳時代」・「塩づくり・石神城」の3部構成でバックヤードツアーを行いました。各時代の登場人物とともに、楽しく東海村のお宝のことを学びました。



8月25日(日)9:30～16:30

J-PARC施設公開

(主催:J-PARCセンター)

J-PARCの加速器や実験施設を見学しながら研究者と話をしたり、実演・工作教室に参加したりして、物質・生命の起源や宇宙の始まりに迫る最先端の研究に触れました。



9月6日(金)9:30～11:00

みんなですこやかウォーキング

(主催:健康増進課)

中丸コミセンに集合し、「中丸 パワースポットと芋菜をめぐるコース」を歩きました。ショートコースとロングコースに分かれ、皆さんお話をしながらウォーキングを楽しみました。



まる博 Snap!!

上手に
できたかな…?



砂の標本を
作ります!



た
く
さ
ん
の
植
物
が
あ
る
な
あ…



ど
ん
な
生
物
が
い
る
?



塩
作
る
の
っ
て
け
っ
こ
う
大
変
!



塩が完成
しました!!

ミ
ツ
バ
ア
ケ
ビ
を
見
つ
け
た
よ
!



これが交流館なんだ……！

古代米
おいしかった



火おこし頑張る！



土器にさわっちゃった！



すてきな大助人形ができました★



かっこいい
大助人形作るぞー！



真崎古墳群を探検！



とうかいまるごと博**物**館



11月2日(土)～4日(月)9:00～16:30

みんなで答えてモザイクアート!

東海村文化祭において「好きな給食は何?」というテーマで参加者にアンケートを答えてもらい、その用紙を使ってモザイクアートを作成しました。皆さんの思い出が詰まった素敵な作品になりました。



12月7日(土)9:30～12:00

紅葉のハーバリウム作り

村の史跡「真崎浦舟着場干拓事業跡」の紅葉を使って、紅葉のハーバリウム作りを行いました。講師の(株)鈴木ハーブ研究所の方々と一緒に、自分だけの素敵なハーバリウムができました。



12月22日(日)9:00～12:00

化石発掘体験

須和間地区で毎年大人気の化石発掘体験を行いました。参加者の皆様は時間を忘れて夢中になって取り組んでおり、「難しかったけどまたやりたい!」「たくさん化石がとれて嬉しい!」などの声をいただきました。



12月22日(日)14:00～15:30

まる博ゼミナール「化石ってなぜできるの」

(主催:中央公民館)

5月に十数万年前のハナムグリ(コガネムシの仲間)の化石が村内で小学生により発見されました。講座では当時の発見のエピソードに加え、講師が所蔵する珍しい化石が紹介され、化石ファンを唸らせました。

後期
(10月～3月)

メニューをPICK UP★



1月26日(日)9:00～12:00

探鳥会

(主催:東海村の環境調べ隊)

阿漕ヶ浦公園周辺で鳥の観察を行いました。この日は運よくジョウビタキのこんな写真も撮れました!参加者を自分の縄張りから追い払おうとすぐそばまで来たみたいです。



2月2日(日)13:30～15:30

初公開!新発見の武人埴輪 埴輪が語る古墳時代の東海村

石神地区で発見された武人埴輪を初公開し、塩谷修先生((仮称)歴史と未来の交流館展示監修委員会委員)に埴輪に関する講演をしていただきました。参加者は200人を超える大盛況となりました。



2月13日(木)10:00～11:30

やってみっぺ!糸紡ぎとアンギン編み

(主催:こじゃっぺの会)

糸紡ぎの歴史について触れた後、糸車やアンギン編み(縄文時代の布の織り方)の体験をしました。皆さんとても上達が早く、あっという間に技を習得していました。



2月15日(土)9:00～12:00

村松晴嵐「クロマツ林」リジェネプロジェクト ～クロマツ植樹体験～

(主催:農業政策課)

砂防林の歴史や植樹などのお話を聞いた後、晴嵐の碑周辺で植樹体験をしました。いつかこの場所がクロマツで生い茂る日がくるのでしょうか?みんなが植えたクロマツの成長が楽しみです。



まる博 Snap!!

＼額田小野崎氏とは？／



＼埴輪のお話を聞きました／



アングイン編みで
作ったコースターの
完成★



親子でがんばるぞ！

＼上手に糸を紡げるかな？／



こんな埴輪が村に
あるなんて！



東海村の埴輪をおひろめ★



真崎浦舟着場跡って
紅葉きれいなんだね!



慎重に慎重に...!



紅葉狩り中...



どんな鳥が見られるかな? /



化石発掘中!

クロマツ
大きくなってね!



みんなで植樹してます!



こんな化石を発見!

東海村の埴輪コレクション



①人物埴輪 (茨城県指定文化財)

出土した場所：舟塚1号墳

前立の冠をかぶる王



イケメンな埴輪…！

さんかくきん
②三角巾をかぶる人物埴輪

出土した場所：戸ノ内古墳

呼んだ？



③笠を被る人物埴輪

出土した場所：戸ノ内古墳

武人の姿をした埴輪



弓を持っているよ

④弓を担ぐ軽装武人

出土した場所：茅山古墳



⑤武人埴輪 (村指定文化財)

出土した場所：動燃東海事業所内古墳



⑥武人埴輪の頭部 出土した場所：石神小学校

石神小学校からは
沢山の埴輪が
見つがっているよ！

まえ



うしろ



悪いものが来ないように
バリアをはっているよ

⑦邪霊を鎮める…「力士」

出土した場所：伝 中道前古墳群

⑧悪いものが入らないように…！「盾持人」

出土した場所：茅山古墳

ワナにかがっているのが
縛られているイノシシだよ！
王様に食べられちゃう！

動物の埴輪

いろいろ



⑨イノシシ

出土した場所：茅山古墳



⑩イヌ？

出土地：伝 石神小学校



⑪馬

出土した場所：伝 馬頭根



⑫馬

出土した場所：茅山古墳

聖と俗の境界…

「円筒埴輪」



⑬普通円筒埴輪

出土した場所：茅山古墳

⑭朝顔形円筒埴輪

出土した場所：茅山古墳



くわしくは次のページの
塩谷先生のお話を
読んでみてね



とうかいまるごと**博**物館事業 初公開！新発見の武人埴輪

講演録 埴輪が語る古墳時代の東海村

会場 東海村産業・情報プラザ

講演者 塩谷修先生



(川村学園女子大学 教授・(仮称)歴史と未来の交流館 展示監修委員会副委員長)

皆さんこんにちは。塩谷と申します。

先ほど新しく博物館ができるというお話がありました。今日は、新発見の埴輪だけではなく、県指定文化財の人物埴輪や村指定文化財の武人埴輪、それからロビーにも東海村から出土した様々な埴輪が展示してあります。東海村にはこんなにたくさんの埴輪があります、博物館ができれば展示されます、そんなことを皆さんに知っていただくことが開催のねらいの一つになっているようです。

私は長く博物館に勤務してきました。博物館に関する事で、忘れないうちに皆さんにお伝えしたいことがあります。博物館というものは、「たくさんの埴輪があるから博物館を作ろう」とか、「展示する資料がたくさんあるから博物館を作ろう」とって考える人が多いですね。30年以上学芸員をしてきて気づいたことがあります。博物館を作って、地道に調査研究し、情報を発信していくと、資料が博物館に自然と集まってくるのです。博物館ができて十数年経つと、色々な資料や情報が博物館に蓄積されていきます。一般には、まず資料があって、そこから博物館をと考える人が多いのですが、私は資料がなくても博物館は作るべきだと思うのです。長い年月のなかで、地域から資料が散逸してしまっても、博物館ができると戻ってくることがあります。ですから、東海村に博物館ができるということには大きな意味があると思います。これから、博物館と資料との関係を念頭に置きながらお話したいと思います。

東海村の埴輪の話をする前に、埴輪はなぜ作られたのかという謎に触れておきたいと思います。埴輪はなぜ作られたのかを考古学者が完全に解明しているかということ、実はまだまだ分からないことがいっぱいあります。

埴輪は、古墳の墳頂部や中段、あるいは裾部、造り出しのような付属施設などに立て並べられています。外から見えるように立てられていて、何かを表現しているようです。一体何を表現しているのでしょうか。

それを解明する前に、埴輪の起源を考えてみましょう。まず、土師氏と呼ばれる人たちの祖先伝承を見てみます。『日本書紀』垂仁天皇8年の条にこんな話があります。野見宿禰のみのすくねの提言により、近習者の殉死（生きたまま墓に埋める）の代わりに、人や馬の埴輪を作らせたというものです。

土師氏は古代の天皇などの葬送儀礼に携わった集団で、野見宿禰は「土師氏」の祖先として描かれています。埴輪作りも土師氏が行ったのだろうという伝承の中でこの話が作られています。考古学の研究が進展する中で、埴輪の移り変わりが徐々に明らかになり、この「殉死の代わりに人や馬の埴輪を作った」説は成り立たないことが分かってきました。実は、人や馬の埴輪が作られるようになるのはいろいろな埴輪の最後で、最初に古墳に並べられた埴輪は円筒形や壺形の埴輪でした(図1)。

どのように埴輪が生まれたのか、岡山大学で考古学を研究していた近藤義郎さんと春成秀爾さんが明らかにした埴輪の起源を見てみましょう(近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』13-3 1967年)。

舞台は、古墳が生まれた近畿地方の奈良や大阪ではなく、今の岡山県地方です。近藤さんと春成さんは岡山県の遺跡を調査して、弥生時代のお墓から酒などを入れたお供え用の壺とそれを載せる器台が出土することに注目しました。弥生時代の終わり頃になると、この地方の王様のお墓がどんどん大きくなって、直径50mくらいのまるで古墳じゃないかというくらいのお墓になっていきます。それにともない、お供え用の壺と器台も装飾的になり、高さ40~50cmだったものが背丈ほどに大きくなって、それが円筒埴輪につながっていったのです(図2)。考古学者がモノの形の変化を読み解いて、埴輪の起源は弥生時代の岡山にあるということ、王の墓にお供え物をした壺と器台が巨大化して最初の円筒埴輪になったことを証明しました。

埴輪も古墳のように大和で成立したのだらうと考える人が多いのですが、そうではないということを経験的な調査によって証明したのです。地域の歴史を読み解くことによって、日本の歴史が見直された事例でもあります。日本の歴史を明らかにするために、地域の歴史研究が大きな役割を果たしたと言えます。

さて、円筒埴輪の起源が明らかにされたことによって、埴輪っていつ

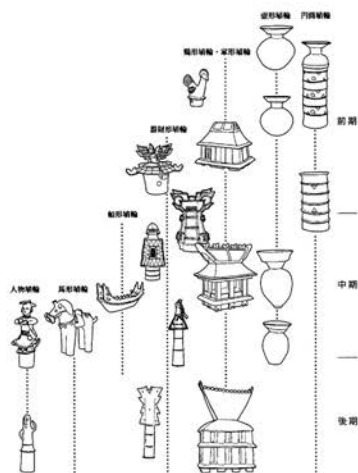


図1 埴輪の移り変わり
(和田晴吾「前方後円墳とは何か」『前方後円墳』岩波書店2019年より 高橋克壽原図)

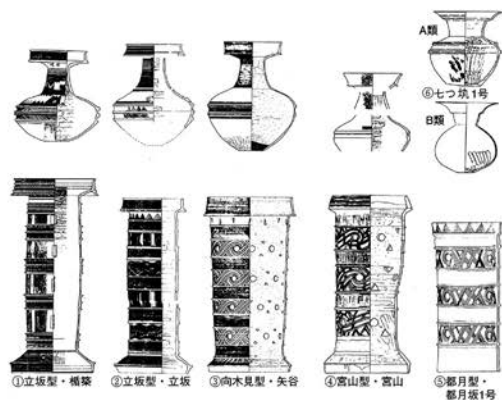


図2 特殊器台から円筒埴輪へ(左から右へ)
(近藤義郎『前方後円墳と吉備・大和』吉備人出版2001年より)

たい何だろうという謎の半分が見えてきました。これは、三重県伊賀市にある石山古墳、全長120mの前方後円墳に立て並べられた埴輪を復原したイラストです(図3)。後円部の中央に家形の埴輪ひつぎが置かれ、その下には古墳に眠る王の棺が埋められています。そして、それらを囲むように、円筒埴輪がぐるりと立て並べられています。

この埴輪はいったい何を表しているのでしょうか。お供え物を入れた壺と器が円筒埴輪の起源であるとお話しました。つまり、イラストにあるような円筒の列は、被葬者に大量の飲食物をお供えしているということを表しています。これだけたくさんあれば、死後の世界でも一生困らないほどの飲食物をお供えすることになります。また円筒埴輪の列には、埋葬の場を囲んで邪悪なものを排除するという意味もありました。邪悪なものが王の棺に入ってこないよう、円筒埴輪で結界していたのです。

それでは、人物埴輪や動物埴輪の意味は何なのでしょう。

会場に展示してある埴輪を見てください。人の形をしていますね。大刀を持っているので武人と思うかもしれませんが、私たちが見たままの姿は、作られた当時の本当の意味を表しているのでしょうか。

これは、有名な「踊る埴輪」です(図4)。東京国立博物館が所蔵していますが、戦前に埼玉県熊谷市の古墳から出土した埴輪だそうです。左手を挙げ、右手を下ろした姿は、歌を歌いながら踊っているようですね。「踊る埴輪」と戦前の考古学者が名付けて、ずっとそのまま博物館やいろいろな所で紹介されてきました。しかし、埼玉県で埴輪を研究している塚田良道さんが踊る埴輪は本当に踊っているのかと疑問を投げかけたのです(塚田良道『埴輪を知ると古代日本人が見えてくる』洋泉社 2015年)。

塚田さんがやられたのは、気の遠くなるような作業です。埴輪の形だけでなく、古墳のどの場所から他のどんな埴輪と一緒に出土したのかということ在全国の人物埴輪を可能な限り集成して研究したのです。その中で、踊る埴輪が馬形埴輪の横に配置されることが極めて多いことに気が付きました。踊る埴輪は、なぜか腰に鎌をさげていました。この鎌は、馬の餌の草を刈る鎌なのかもしれません。形だけでなく、埴輪の配置と組み合わせを丹念に調べることに



図3 石山古墳後円部墳頂の埴輪列
(三重県埋蔵文化財センター「石山古墳」2005年より)

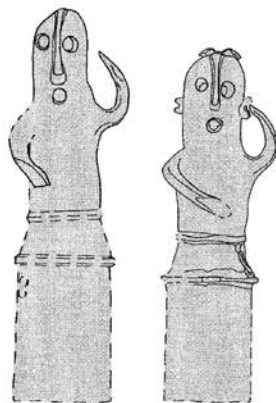


図4 「踊る埴輪」
(塚田良道2015年文献より)

よって、見た目は踊っているかのような人物が、実は飾り馬の手綱を曳く馬飼^{うまかい}だとわかったのです。たくさんの事例を地道に調べることによって、本当の姿が見えてきます。

江戸時代の島田髻のような髪形をした女性の埴輪は、独特な衣装を身に着けて神に仕える巫女^{みこ}の埴輪だと言われてきました。巫女の埴輪は、食器のようなうつわを捧げています。塚田^{うねめ}さんはこの人物も巫女ではない、古代の天皇や皇后などに仕えて食事の世話をしていた采女のような女性で、彼女たちが飲み物や食べ物を捧げて王に奉仕している姿だと言っています。埴輪の意味を明らかにするのに、とても重要な考えです。

円筒埴輪は、古墳を大量の飲食物で満たして被葬者に奉仕しています。そして人物や馬も奉仕しているのです。いったいどこで奉仕しているのかというと、おそらく被葬者が暮らすあの世だと思います。古墳に立て並べられた埴輪は、あの世、他界を演出する道具立てとも考えられています。埴輪には、あの世に邪悪なものが入り込まないように円筒埴輪で結界し、邪鬼を追い払う辟邪の役割もありました。私は、この辟邪と奉仕の思想が埴輪が演出する他界を象徴する思想、他界観だったと考えたいのです。

さて、ここから東海村の埴輪にも触れていきたいと思います。

新発見の武人埴輪が出土した戸ノ内古墳。戸ノ内古墳のすぐ近くに石神小学校があり、その中にも古墳がありました。茅山古墳と言います。小学校の敷地の中に、墳丘の一部が残されていました。学校を建て替える時に発掘したところ、たくさんの埴輪が出土しました（茂木雅博・高橋和成・米川暢敬編『常陸茅山古墳発掘調査報告書』東海村教育委員会2006年）。石神小学校は、以前から人物の頭などたくさんの埴輪が出土していることが知られていました。茅山古墳は全長40mほどの前方後円墳でした。後円部と前方部のつなぎ目のところ、くびれ部から石棺が出てきたのです。真弓石と呼ばれる白い石材を使った綺麗な石棺でした。盗掘されていなかったのに、遺骸もわずかに残っていて、副葬品も残っていました。古墳の埋葬施設はふつう墳丘の中心部（後円部）にあるのですが、茅山古墳の石棺はくびれ部に埋葬されていました。

古墳の周りには溝があって、古墳の上を立て並べられていた埴輪は長い年月を経て転げ落ち、溝に埋まった状態で出土します。茅山古墳の場合も周溝からたくさんの埴輪が出てきたのです。その多くは、くびれ部付近から出土しました。この埴輪は「大刀を担ぐ武人埴輪」です（写¹）。珍しい埴輪ですね。左肩に大刀の柄の部分を上にして、左手で大刀を担いでいる人物です。刀を持っているということは武人や兵士でしょうか。しかしよく見てください。鎧は着いていません。頭を見てください。



写1 大刀を担ぐ武人埴輪
（『茅山古墳発掘調査報告書』東海村教委2006年より）

頭についているのは冑ではなく、鋸歯状の冠のようなものを被っています。武人埴輪と呼んでいますが、普通の武人ではないような気がします。

さてこちらの埴輪は盾持ち埴輪です（写2）。本当はこの上に頭があって、残って見えているのは胴体の部分です。そして体の前に弓矢などを防ぐ盾を持つ人物です。とすると、この埴輪もやはり武人や兵士のような埴輪と考えるべきでしょうか。

先ほど、多くの埴輪がくびれ部から出土したと申し上げましたが、盾持ち埴輪だけは前方部の先端から出土しています。盾を持ってお墓の前に立つ護衛の兵士が想像されますが、ひとまず全国各地の事例からその特徴を見てみましょう（図5）。

まず、盾を持ち立っています。ただ、足や手がなく、頭だけのこけしのような形が特徴です。頭の形は様々でユニークです。とても顔が大きくて、なんだか笑っているような、怒っているような、大声をあげているような独特の表情をしています。さらに、顎が突出して（図5の右下）、耳が大きく表現されています。実際の顔としては変なので、「仮面」をつけているのではないかと思います（写3）。

もう一つの特徴が、盾と共に武器を持っていること、先のとがった槍に鎌のように横に刃をつけた「戟げき」と呼ばれる武器です（図6）。

出土した場所はどうでしょうか。盾持ち埴輪は古墳の一番外側に点々と並んでいます。人物などの他の埴輪はその内側から出てくるのです。一番外側に立っているのが盾持ち埴輪で、おそらく邪悪なものがお墓



写2 盾持ち埴輪



写3 怒る表情の盾持ち埴輪
(群馬県高崎市保渡田八幡塚復元古墳：筆者撮影)



図5 多様な盾持ち埴輪
原図は各報告書
(塩谷修『前方後円墳の築造と儀礼』同成社2014年より)



図6 群馬県太子塚古墳の戟を持つ盾持ち埴輪
(かみつけの里博物館『太子塚古墳を考える』2019年より)

に近づかないように守っているのでしょうか。では、盾持ち埴輪が何者なのかという問題を考えてみましょう（塩谷修「『盾持ち』人物埴輪から前方後円墳を考える」『太子塚古墳を考える』かみつけの里博物館 2019年）。

皆さんは奈良時代の方相という名前を聞いたことはありますか。もうすぐ節分ですね。節分の豆まきで「鬼は外、福は内」とやると思いますが、この行事の元になっているのが鬼を追い払う役目の方相なのです。追儼ついなと呼ばれる宮中の年中行事です。また、奈良時代の養老喪葬令には、「凡親王一品。方相轎車各一具」とあり、天皇や皇族の葬儀でも轎車（棺を乗せて運ぶ車）とともに方相が用意されたと書かれています。

一方、古代の中国では「方相」は「方相氏」と呼ばれ、追儼とともに、皇帝の葬儀に際して棺を先導し、邪鬼を追い払う役目を果たしていました。このように、日本の方相の源流は中国にあり、古代中国の方相氏が日本に伝わってきたと考えられます。

方相がどんな姿かという点、『延喜式』の記載に、追儼の方相は「大舎人（宮中警護の下級役人）の中の長大なる者が扮し、黄金四目の仮面を着け、黒い衣に朱い裳を身にまとい、右手に戈左手に楯を執り、追儼の先頭に立って邪鬼を駆逐していた。」とあります。「戈」は横に刃をつけた、「戟」と同じように引っ掛ける武器です。方相の姿は、盾持ち埴輪の特徴によく似ていますね。前漢時代頃に始まる中国の方相氏が日本に伝来し、盾持ち埴輪として古墳に表現され、その後律令制の方相につながっていく流れが想定されます。広辞苑で「方相」を引くと、奈良時代に中国から伝わったとあるのですが、実際は古墳時代、一番古い盾持ち埴輪が4世紀の終わり頃なので、その頃までには中国から伝来していたということになります。最近では、方相氏の伝来がさらに遡る可能性が高くなってきて、弥生時代の終わりには大和の地に伝わっていたのではないかと考えられています。

茅山古墳から出土した盾持ち埴輪も、私たちが節分で鬼を追い払うように、邪鬼を払い、古墳を守っている人なのですね。守っているのはこの世の古墳というよりも、あの世の古墳に暮らす被葬者を守っているのだと思います。

ここまで、古墳に立て並べられた埴輪の意味についてお話してきました。私たちが埴輪の形だけを見て想像した意味と、当時の人が埴輪に意図したものとは相当違っているかもしれないというお話でした。というのも、埴輪の世界は現実世界ではないからなのです。埴輪はあの世の世界、他界を表現していて、当時の他界観は日本独自というよりは古代の中国の神仙思想に大きく影響されていたと考えられます。というわけで、形だけをみて判断すると、実は全く違うものということがあるのだと思います。

最後に、埴輪を研究する上でもう一つ大切な「埴輪を作った人や生産地」の問題についてお話ししたいと思います。埴輪が出土するのは、埴輪が運ばれてきて、古墳に立て並べられた跡です。誰かが埴輪を作って、古墳まで運んできているのですね。そこには、生産者と消費者（生産地と消費地）のような関係、またそれらを結ぶ流通の問題があるわけで、そのあたりが地域社会を考える上ではとても重要です。

東海村の埴輪について考えてみましょう。この地域の埴輪の生産と流通については戸ノ内古墳の発掘調査報告書の中で、稲村繁さんの詳細な論考が掲載されています（林恵子・宮田裕紀枝・川又清明編『戸ノ内遺跡 戸ノ内古墳発掘調査報告書』東海村教育委員会2019年）。稲村さんは茨城だけではなく、関東地方の埴輪を広く研究していて、特に埴輪がどこで生産されて、どういう風に流通したのか、あるいは埴輪を作る体制がどういったものなのかということを詳しく研究されています。稲村さんの研究を参照しながら、最後に埴輪の生産と流通を考えてみたいと思います。

埴輪作りに関しては、埴輪を作る職人の集団、工人集団がいたと考えられています。埴輪は窯を築いて作られるので、埴輪を焼いた窯跡が全国各地で見つかっています。そこで工人集団が埴輪作りをしていたわけです。ということは、工人集団の特徴、作り方が埴輪に現れてくるのではないのでしょうか。埴輪の土にはその土地の特徴が表れますから、使用している土の特徴が工人集団の特徴にもなってくるわけです。

それを踏まえて東海村から出ている埴輪についてみていくと、稲村さんは二つの工人集団とその窯があると考えているようです。一つは小幡北山型と言います。その作り方の特徴は、上半身と下半身を別々に作る、分離成形という特徴です。全国的にみると、全身像の人物埴輪は上下一体で作るのが多いのですが、小幡北山型の人物埴輪は上半身と下半身を別々に作っています。東海村の埴輪では、戸ノ内古墳出土の三角巾形の冠帽を被る人物埴輪（写4）を見てください。上半身と下半身が別々に作られていて、今私たちが見ているのは上半身です。下半身が見つからないのです。戸ノ内古墳をもう少し調査すると下半身が出てくるかもしれませんね。一体で作るのが大変だったからなのか、別々に作らないと窯に入らなかったのか、確かなことは分かりません。そして、もう一つは土の特徴で、シルト質の粘土のような緻密な土、混じり気のないきめの細かい土で作られていて、表面の色が明るい茶褐色をしています。

戸ノ内古墳から出土した小幡北山型の代表的な人物埴輪の衣服をみると、挂甲と呼ばれる鎧を着ています。手には籠手を着け、腰には刀を差しています。武人かなと思われませんが、頭には冑ではなく三角巾形の冠みたいな帽子を被っています（写4）。ただの武人



写4 三角巾形冠帽を被る武人埴輪



写5 鞆(ゆぎ)を背負う軽装武人埴輪

や兵士とは少し違うようにも思いますが、もっと細かく全国の事例を調べてみないと分かりません。こちらの人物は笠をかぶっています（写5）。農民かなとも思われますが、見てください。この埴輪は弓矢を入れた^{ゆぎ}鞆を背負っています。ところが鎧は着いていません。弓矢を背負っているので軽装の武人と呼んでいますが、頭には笠のようなものを被り、一体何者なのでしょう。県指定文化財の人物埴輪は（写6）、村松の舟塚1号墳という全長40mくらいの前方後円墳から出土しました。戸ノ内古墳と同じように鎧を着ていますが、頭には三角巾形の冠帽を被っています。同じく、上半身と下半身は別作りにしています。

もう一つの工人集団の特徴は、久慈型と言います。久慈型というくらいですから、久慈川とも関係すると思われれます。その特徴は、木芯中空成形と呼ばれる腕を作る技法です。埴輪の腕を作るとき、ふつうは土で棒状に作った腕を肩に差し込むのですが、久慈型の腕は、成形しやすいように木の棒に練って紐状にした土を巻き付けて作っています。焼きあがると芯に使った木の棒はなくなりますから、細い穴が腕のなかに空いて、それが久慈型の職人の特徴です。土の特徴は、小幡北山型の緻密な土と比べると、久慈型は白色の砂粒や砂礫が混じっていてとても粗い土で作っています。色は、明茶褐色ではなく、暗い茶褐色をしています。

久慈型の代表的な埴輪が、旧動燃の敷地から出土したと伝えられる武人埴輪（写7）です。これは、鎧を着て冑も被っている、まさしく武人の姿をしていますね。近くで見ただけだと粗い土で作られていることが分かります。それから先ほどの茅山古墳の埴輪も久慈型の埴輪で、同じ特徴を持っています。

それでは、小幡北山型や久慈型の窯はどこにあるのでしょうか。小幡北山型の埴輪を焼いた窯の一つは、旧勝田市、現在のひたちなか市にある馬渡埴輪製作遺跡です。そしてもう一つあって、名前のもとにもなっている茨城町の小幡北山埴輪窯跡です。この二か所が小幡北山型の埴輪を生産した窯として知られています。もう一方の久慈型の窯はどこかという、名前の通り久慈川の中流、常陸太田市の元太田山埴輪窯跡です。

東海村には、小幡北山型の埴輪と久慈型の埴輪の両方が供給されているようです。私も今回の話をするのに、あらためてそれぞれの埴輪を見てみました。



写6 手甲をつけた武人埴輪（県指定）



写7 冑を被った武人埴輪（村指定）

確かに作り方は特徴的です。分離成形だったり、腕の木芯中空成形だったり、それぞれの特徴が表れているのですが、同じ型の埴輪の中にも微妙に土の違いがあります。例えば茅山古墳の盾持ち埴輪の土はとても粗い。同じ久慈型の旧動燃出土の武人埴輪の土は、それよりはきめ細かい。小幡北山型の埴輪では、戸ノ内古墳の埴輪はとても緻密できれいな土です。これに対し舟塚1号墳の人物埴輪の土は、戸ノ内古墳よりも粗い感じがします。

これらの埴輪を分析した稲村さんは、「東海村に供給された小幡北山型は主に馬渡で作っている」と言っています。また、「東海村に供給された久慈型埴輪は元太田山もあるけれども、元太田山の職人が馬渡の窯に出張して作っているものもある」とも言っています。稲村さんじゃないと判断できないなと思っているのですが。ただ、私が見て感じた微妙な土の違いは、稲村さんが言おうとしている一部を表しているのかもしれないと考えています。

東海村は、久慈川と那珂川の間にはさまれています。久慈川の河口にも近いし那珂川の河口にも近い。あるいは真崎浦のような太平洋に面する入り江もあって、いずれにしても地理的に水上交通の要地であったと考えられます。

霞ヶ浦沿岸の小美玉市に舟塚古墳という大きな前方後円墳があって、そこは高浜入の前方後円墳が集中する場所で、舟塚古墳の埴輪は分離成形やきめ細かい土が特徴です。どうやら、小幡北山の埴輪窯は高浜入の前方後円墳にもたくさんの埴輪を供給していたようです。高浜入という所は、奈良時代に国府が置かれる場所です。東海道の陸上交通と霞ヶ浦の内陸水運が交わる、水陸交通の要衝の地です。この要衝の地と小幡北山埴輪窯は密接に関係していて、小幡北山埴輪窯は涸沼川流域に位置し、涸沼川は那珂川河口につながっていて、那珂川河口は太平洋の水上交通や久慈川流域にもつながっています。そして、東海村はこれらの水上交通網の重要な一角に位置しているわけです。

埴輪から垣間見える古代の東海村の位置づけは、ベースとなる資料収集が引き続き進められることによって、徐々に、より一層明らかになっていくと思います。地道な調査研究によって、地域の歴史が明らかになり、日本の歴史を塗り替えることもあります。それができるのが博物館（歴史と未来の交流館）です。ぜひ応援してください。

<参考文献>

- ・近藤義郎『前方後円墳の成立』岩波書店 1998年
- ・塚田良道『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣 2007年
- ・和田晴吾『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館 2014年
- ・塩谷修『前方後円墳の築造と儀礼』同成社 2014年
- ・稲村繁「人物埴輪からみた東国の埴輪生産と供給」『博古研究』第58号 2019年（本稿は、2020年2月2日に行った講演内容に加筆してまとめたものです。）



まる博研究員からの報告

村内で活躍するまる博研究員による報告です。



歴史と未来の交流館研究員（通称：まる博研究員）とは？

約1年間の養成講座を経て、歴史と未来の交流館を拠点に地域の歴史や自然に関心を持ち調査・研究等さまざまに活躍している方々です。現在13名の方々が「まる博研究員」としてそれぞれに活動しています。

レポート

1 身近な石仏めぐり

まる博研究員 松本 亮子

東海村の白方に住んで50年になります。

子供の頃、家から歩いて十数分の所に、道路沿いに鳥居のある一角があり、大木が祠に覆いかぶさるように生い茂っているのを不思議な気持ちで見っていました。十数年前に大木は切られてしまいましたが、今でもたたずまいはそのままです。

この度、「まる博」で東海村の石仏石塔について学ぶ機会があり、先生と実際に見て回りながら講義を受ける貴重な体験をさせて頂きました。

この鳥居は、白方和尚塚の庚申塚で天文五年（1740年）に造立されたそうです。庚申信仰や三尸（さんし）説などのお話を聞きながら、当時の人々がどのような思いで建立されたのだろうと思いました。

安産の祈願、子の健やかな成長、病の平癒の願いを込めて—

その他にも東海村にはたくさんの石仏石塔があることも知りました。

今日まで、その時代時代に地域の人々とともに大切に祀られてきたのでしょう。その時の流れに感慨深いものがあります。風雪にさらされお姿がはっきりしない石仏もあります。次の世代にも地域の人々に守られることを願いながら、また石仏に見守っていただきたいと思うのです。

散歩のおりには、道端の石仏に思いを寄せてみませんか。



縄文人の祈りと東海村

まる博研究員 飯塚 幸治

地球は19,000年前頃(最終氷期の最寒冷期)から徐々に温暖化が進み、6,000年前頃(縄文時代前期)になると気温は現在より2℃程高く、海面は3～5メートルも上昇し(縄文海進)、久慈川の河口域や真崎浦・細浦は、那珂台地を穿つように入り海となって内陸部まで続いていた。水辺の崖上台地は、漁撈、狩猟・採集に適した場所であったのだろう。石神、白方、荒谷台、南台、須和間、平原、照沼地区などには多くの縄文時代の遺跡が確認されており、縄文人の日常生活を伺い知ることのできる遺物も多数出土している。

なかでも、縄文人が祈りや祭祀に用いていたという翡翠製の大珠(堀米A遺跡から出土)に注目したい。翡翠の産出地は現在の新潟県糸魚川市周辺という。そこから真東に当たる日出る処に住む縄文人は、朝陽の昇る大海原に向かい翡翠の大珠をかざしながら、生命の誕生と再生を祈っていたのかもしれない。



身近な古墳～海風吹き抜ける別天地～

まる博研究員 末村 裕信

15万9636。

これは日本国内で確認されている古墳・横穴の数です。(平成28年度文化庁調べ)

コンビニ店舗数の3倍にもなります。茨城県内にも1862基の古墳の数が確認されており、前方後円墳の数だけで比較すると全国2位(444基)です。日本最大の大山陵古墳(仁徳天皇陵)を有する大阪府の182基を大きく上回っています。

東海村にも4～7世紀ごろに作られた数多くの古墳があり、干拓前の海に面した丘陵地に古墳が密集しています。

昨夏、最高気温34℃の中、その一つである真崎古墳群を訪れてみました。木々が真夏の日差しを遮り、細浦からの海風が心地よく吹き抜けるそこは、まさに別天地。夏の暑さを忘れさせてくれました。太古の人々もこの気持ちよさを求め、この地に住んだのかもしれませんが。

当時の生活に思いを馳せ、皆さんもぜひ古墳を訪れてみてはいかがでしょうか。



博 まる博ジャーナル

発行 令和2年3月31日
発行者 東海村教育委員会
所在地 茨城県那珂郡東海村東海3丁目7番1号
印刷 大富印刷株式会社

(仮称)歴史と未来の交流館
令和3年7月開館に向けて準備を進めています！

